

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chuugoku Gakkai

二〇一一年(平成二十三年) 四月三〇日
第一號(通卷第十九号)



編集◎京都大学文学研究科 平田昌司
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
メールアドレス: chubun.kyoto@gmail.com(「学会便り」編集専用)
発行◎日本中國學會
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内
ファックス: 03-3265-1148 ext. 1
メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

- ◎ 目録
- 〇二 お見舞いのご挨拶
川合康三
 - 〇四 第1回若手シンポジウム実施報告
静永 健
 - 〇六 和漢比較文学会について
後藤昭雄
 - 〇八 章炳麟シンポジウム
「第一回「東亜学術思想」国際学術研討会:
章太炎与晚清中国学術」に参加して
坂元ひろ子
 - 一〇 国際ワークショップ「現代中国における儒教復興
——フィールドからの調査報告」参加記
水口拓寿
 - 十二 「香港:都市想像與文化記憶」国際研討会に参加して
山口 守
 - 十四 中国の方言研究はなにをめざすか?
——「首届中国地理語言学暨中方言保存利用
国際学術研討会」報告
岩田 礼
 - 十六 国内学会消息(平成22年)
 - 二十七 平成23・24年度各種委員会の構成
 - 二十八 第63回大会開催のお知らせと研究発表募集
学会ホームページと事務局用メールのアドレス変更について
事務局彙報

お見舞いとご挨拶

川合 康三
理事長

このたびの東日本大震災で被災された方々に、地震・津波・原発事故で今も困難な暮らしを余儀なくされている方々に、心からお見舞い申し上げます。

4月から2年間、日本中国学会の理事長を務めること

になりましたが、そのご挨拶より先にお見舞いを申し上げなければなりません。このような事態に向き合うと、自分に何ができるのだろうか、中国学研究は今どのような意味をもちうるのか、そんな思いが自分のなかで渦を巻きます。テレビに映し出される、この世の現実とも思われない悲惨を極めたありさまには、魂魄飛散する思いをするのみならず、何もできずに「見る悪魔」と化している自分にいたたまれなくなります。それをこのように言葉にすることもまた自己嫌悪を掻き立てるものでしかありません。型どおりの思考のなかでぐるぐる回るほかない自分、それを語ろうとすればするほど、無力感が増幅するばかりです。

言葉は現実に対して力をもちうるか——この普遍的な問いが今回のような極端な現実と直面すると、のっぴ

きならないものとして突き刺さってきます。わたしたちは「言葉の力」を信じているからこそ、それぞれの分野で研究を続けています。それが根幹のところまで揺さぶられるのです。

仙台在住の知友の何人かと電話で直接お話した以外は、テレビなどのメディアを介して接するだけで、その場に身を置きこの目で見ただけではありませんが、報道を通して心揺り動かされる場面が数知れずありました。わたしが驚いたのは、被災された方々が例外なく、実に冷静に振る舞われ、物静かに語っておられたことです。人はこのような状況に突然見舞われながらも、かくも沈着に対応できるものなのかと、人間の可能性をかいま見た思いをいたしました。

被災者の語る「言葉」にはっとした例の一つ記します。最近、「……させていただきます」という言い方が乱用されているのに違和感を覚えていました。「理事長を務めさせていただきます」といった言い方です。妙にへりくだった、卑屈な感じが伴うように思っていたのです。ところが家族のほとんどを失った一人の老婦人が「小学校六年生の孫を一人のこしていただきました」と声低く、さらっと言われたのを聞いた時、突然涙が溢れてきました。そこには人を超えた大きな存在を前にしてすべてを受け入れる謙虚な生き方、すべてを受け入れながらも決して意気阻喪せずに、与えられたもののなかで生きていこうとする勁さを感じられました。「天罰だ、津波で我欲を洗い流せ」と言い放った知事がいたそうです。中国では天が災害を与えるのは庶民に向かったものではなく、為政者に対する警告や懲罰であると考えられてきたことを思えば、なんとも滑稽で皮肉な言辞ですが、この著名人の傲慢さは普通の人々の謙虚な美しさや勁さを一層際立たせてくれました。津波にさらわれた人々も同じように海辺の地でそれぞれの仕事に地道に勤めてきて、その生涯を見事に生ききったのだと思います。たとえ突然の災禍に巻き込まれるという不幸な最後を迎えたにしても、そこまでの生き方は十分に意味あるものであったのではないのでしょうか。人間の価値は地位や名声にまったく関わりないということが改めてわかります。

三陸海岸の入り組んだ地形の、小さな入り江ごとに小さな漁港があり小さな集落がある、それがどこまでも続く土地を、わたしもずっと前に旅したことがあります。そこで生を営んできた人たちの智慧と力、それに比して「学識者」なるものはなんと脆弱な存在なのでしょう。原発で今何が起きているのかすら説明できない専門家——そのみじめで哀れな姿を見ると、「職能」ということについてわたしたちにも強い反省が求められます。昔の中国においては読書人が一つの階層であったのと異なり、わたしたちは職業として勉強しています。職業である以上、社会に対して責任をもたねばならないと。

とはいえ、初めに記した、中国学研究は今日どんな意義をもちうるか、この問いにわたしは即座に答えることができません。ただ、今でも意義があると信じてはいます。いつたどりつくことができるかわからない答えに向かって、日々の精進を続けるのみです。今はせめてこの困難な問いを背負い続けていることで、許しを乞うほかありません。

前理事長の池田知久先生は、四年間にわたってこの学会のために骨身を削ってこられました。多くの課題を一つひとつ解決されましたが、新たに設けられたことなかで最も大きなものとして、大学院生の会費を大幅に減額したこと、若手シンポジウムを開催したことの二点が挙げられます。いずれも若い会員のための措置であることが共通しています。またいずれも学会の厳しい財政状況のなかで苦渋に満ちた決断であったはずです。年々減少する会員、それに伴って減っていく予算、そのなかであって院生会費を半額近くまで引き下げたのは、次世代を担う研究者をなんとか育てたいという切実な思いあつてのことでしょう。これによって大学院生たちがこぞって入会し、逆ピラミッド型に偏った年齢構成が本来のかたちに戻ればありがたいことです。

若手シンポジウム——50歳という線をとるあえず引いたそれを「若手」と称するのは抵抗があり、藤井省三理事のように「いわゆる」若手シンポジウムと言いたいところですが——この企画も青・中・老のうちの青・中の世代の

人たちに自由な場で存分に活動していただきたいという池田理事長や理事会の考えから発したものでしょう。50歳の線引きには異論もあるでしょうが、年齢はともかくとして、その意図は既存の基準を押しつけないこと、それに囚われないところから新たな成果が生まれることへの期待がこめられたものであろうと思います。したがって「若手シンポジウム」の口頭発表や論文集は、大会の研究発表、『日本中国学会報』掲載論文の単なるジュニアクラスになってしまつては意味がありません。独自の展開こそが求められるはずです。3月26日のそれは、実行委員会の渡邊義浩委員長や委員諸氏、各部会の主催者、そして発表者・司会者・コメンテーターの方々の努力で、まったく予算を使わないという、つまりはすべて関係者各自の負担に頼って行われました。このあとは報告者の論文を選んで論文集を編纂するという大変な仕事が始まり、さらに今後どのようにするかという問題がのこっています。今回参加された方々の感想・意見を広くうかがったうえで、異論・反論も吸収しながら、継続するか否か、継続するとしたらどのようなかたちがふさわしいか、そうした議論を交わすなかで道筋ができていくことでしょう。

院生会費の引き下げ、若手シンポジウムの開催、それは即効薬にはならないとしても、学会が若々しく生き生きとなるのに、必ず功を奏する日が来ると思います。若い人たちにとってのみならず、すべての会員にとってよりよい学会になってほしいと切に願っています。そのためには一部の人が占有し専断する集まりではなく、会員誰もが公平に平等に意見を言い合える場であってほしいし、そうあらねばならないはずです。理事長という器でないことは、ここまで拙文を読んでこられたら十分わかりでしょうが、せめて開かれた学会にすべく努めていきたいと思っています。

第一回若手シンポジウム 実施報告

九州大学
静永 健

2011年3月26日(土)東京大学本郷キャンパス法文学部1号館において、本シンポジウムの第1回「中国学の新局面」が開かれた。参加者は約100名。渡邊義浩理事を実行委員長に、先秦～唐代までを

第一部会、宋～清代を第二部会、近現代を第三部会、そして日本漢学および中国史学分野を第四部会として、各部会およそ10名の発表者が登壇、それぞれ発表20分、コメント5分、質疑応答15分の持ち時間で進行された。

改めて申すまでもなく3月11日の大震災直後という異常な状況下での開催であった。九州在住の私は、委員の一人でありながら殆んどその準備に携わることが無かったが、渡邊委員長をはじめ首都圏在住の実行委員各位の奮闘努力、そして何よりも様々な困難を乗り越え、シンポに参加された全国の学会員の皆様に心からの感謝を申し上げたい。なお、本シンポの事業は10月刊行予定の論文集編集まで、まだあと幾つかの作業があるが、今はその中間報告として、シンポ開催当日までのことを書き記すものである。

本シンポは池田知久理事長の発案により、およそ2年前から準備が始められた。私自身、ある日突然牧角悦子

副理事長よりお電話をいただき、何と大変な任務を付託されたものだと、躊躇を隠せなかった。その主たる目的は三点。学会員の減少傾向を何となく止めること(既存の哲学・文学・語学の三分野の他に日本漢学や歴史学研究を加えた)。従来の中国学の枠に拘らず、若い力を結集して新しい研究の方向性を模索し、学界全体の活性化を図ること(故に本シンポのテーマを「中国学の新局面」とした)、そして何よりも全国各地の若手研究者の育成支援である。筆者の理解ではこの「若手育成」には両義がある。一つは言うまでもなく現在各大学院に在籍する多くは20～30歳代前半の若手会員の研究を支援するものであるが、もう一つは、本シンポ開催を通じて学会運営やそれに伴う様々な実務を見習うという意味での30歳代後半～40歳代会員の能力開発である。窃かに思うに池田理事長の意図はここにも存したのではないかと憶測する。受付や会場設営等の作業は我々「若手」には平素より熟知するところであるが、研究発表だけでなく、「初めての司会」「初めてのコメンテーター」など多くの機会が我々30～40歳代会員に委ねられたことは、以後の学会運営においても貴重な経験となったと思う。

話は準備段階に戻る。理事会で本シンポの開催が正式に承認されたのが2010年6月。まず十数名のプレ委員会が組織され、第1回の会合を開いたのが8月(場所は東大文学部)。そこでシンポの日程や募集方法を決定した。開催通知等は学会ホームページを利用し、ポスター印刷など出費を伴う作業は一切行わなかった。また「若手シンポ」と銘打つ以上、その定義について議論されたが、シンポに関わることのできる者を一律「50歳以下」に限定した。これについては応募開始直後より多くの反論が寄せられたが、実はこの規定のお陰で、先にも述べたように今まで本大会では顔を見るのみであった多くの「若手会員」の発言を初めて聞くことができた。この年齢規定は、勿論幾つかの微修正が必要ではあろうが、やはり一定の意義があったと思う。

2010年9月末の締切時点で全国から40数名の応募が寄せられた。また特に嬉しいことには、日本漢学や歴史学方面の若い研究者が本シンポ応募と同時に大挙して新入会することとなった。学会に新しい風が吹き始めた

ような昂揚感を覚えた。

しかし我々実行委員会が直面した“試練”は、実はここからであった。先述の「50歳規定」に基づいて、その枠内での司会者・コメントーターの依頼作業を行ったが、これに相当の日数を費やした(最終確定は翌年2月に至った)。各発表について全国の30~40歳代会員に司会・コメントの依頼をしたのだが、全国のこの世代の研究者は目下それぞれの勤務先において文字通り多忙を極めている。しかも年度末ゆえに日程の上で更に折り合いがつかず、やむを得ず辞退された会員は私が依頼した中でも十指に餘る数に及んだ。だが各部会長をはじめ実行委員それぞれがこの苦労を分かち合えたことが、シンポ実現への強い団結力を培うことができたように思うものである。

そして突然の受難。地震と津波による未曾有の災害を受けたのはシンポ開催の2週間前であった。日に日に深刻さを増す福島第一原発の被害報道も加わり、我々実行委員の中にも動揺が走った。開催の可否をめぐる議論が真二つに分かれた。被災のために参加できなくなった者、交通機関が混乱する首都圏の報道に接し、家族の強い反対によって参加を断念する発表者も現れた。また、当初会場に予定していた開催校より「校舎の被災状況がまだ十分把握できておらず、全国規模の学会の開催許可がおりない」との連絡が入ったのがその1週間後、我々も「もはやこれまでか……」と天を仰いだ。しかし小島毅第二部会長をはじめとする東大スタッフの機転によって、急遽シンポ会場を東大本郷キャンパスに移すことに成功。かくして冒頭に記した通りの開催の運びとなったのである。ただ当初38を予定していた研究発表は、残念ながらことに33に留まった。

だが、学会の将来のため、そして若手会員の研究を守るために、まさしく北は北海道から南は沖縄まで全国の研究者が会場に集まった。被災地から夜行バスに飛び乗り、ようやくにして開催時間に間に合った発表者もいた。下の写真はシンポ当日の昼休みに急遽参加者全員に呼びかけて本郷構内の桜樹の下で撮影したものである。長尾直茂第四部会長曰く、「どんな災害にもめげない若手の勢いを感じて、前途に明るい光を見たように思います。」全く同感である。この撮影の後、我々は被災された方々に

対し、全員で黙祷を捧げた。本シンポは日本中国学会の歴史の中でも長く記憶されるべき集まりとなろう。

ただし今回のシンポの準備段階、かつ震災の混乱の中で顕在化した問題もある。それは我々シンポジウム実行委員会と研究発表予定者、また司会者、コメントーター間の開催当日までの連絡のあり方である。1月中旬、渡邊委員長より全発表予定者に対し、「3月10日を目途に」発表の内容やレジュメの草稿を司会者とコメントーターに送るように指示していたが、開催直前まで何一つ連絡の無い発表者が複数名報告された。被災によって連絡が取れなくなった方々には気の毒だが、それ以前においても、発表者は、司会者およびコメントーターに対し、感謝の言葉とともに、少なくともメール等による2~3往復の発表内容の説明等の連絡を取る義務があると思う。

先端医療や技術工学のような所謂理系と称される学問分野とは違い、我々文系の学術成果の難しさは、それを第三者にも分かるように如何に伝えるかにある。自己の研究成果を第三者に聞いてもらい、様々なコメントや反論を受けることは、我々の学問には必要不可欠な作業なのである。学会とは、まさにそのために存在しているのだということを今後の研究発表予定者に申し上げたい。また、単にコンタクトを取るだけでなく、可能ならば司会者やコメントーターの方々(初対面の場合も多い)の論文や著作を読み、質疑応答に備えることも、自らの研究を拓げてゆく上で必ずやプラスになることである。以上、蛇足ながら筆者が懐く些かの危惧を述べた。

最後に、今回のシンポは「第1回」と銘打つものの、以後の存続の可否を含めて一切が未定である。ぜひ学会事務局や私ども各実行委員に皆様のご意見をお聞かせ下さい。



和漢比較文学会について

後藤 昭雄
成城大学

会員諸氏にはご承知のとおり、昨年(2010年)の広島大学における大会では、部会の一つとして日本漢文の部会が設けられた。それに伴い、日本文学研究における日本漢文学研究者の学会である和漢比較文学会(以下、「本会」)

について紹介する紙幅を与えられたので、中国学の研究者に本会のことを知っていただく貴重な機会であるとして、ご紹介したい。

本会は目的を「会則」に次のように記している。

本会は日本古典文学と漢語文化圏の文学及び文化との比較研究の進展と研究者相互の連絡をはかることを目的とする。

名称を「比較文学会」としているのですが、そのことをうたっているが、実際は日本人が作った漢詩文の研究がそれに増して多い。「文学会」であるので、対象は文学が主である。また「古典文学」が対象である。明治初期までを対象とし、それ以後の近代文学は除外される。

本会は1983年10月に設立された。日本文学研究では時代別、ジャンル別に「近世文学会」、「和歌文学会」

など、多くの学会があるが、その中にある若い学会である。本会の生みの親は、当時、奈良女子大学教授であった新井栄蔵氏である。82年10月に学会設立のための第1回の準備会が開かれたが、それに先立って、金原理氏(熊本大学)と私(当時、静岡大学)が京都に呼ばれ、京大生がよく行くという喫茶店で、既存の学会では研究発表をしても質問も出ないという状況のなかで、日本漢文学研究者の独自の学会が必要だ、と熱く語られる新井氏の話聞いた。

本会では以下のような事業を行っている。

学会大会。年1回。このところ、9月の最終の土曜・日曜日の2日間で行っている。第1日は講演、あるいはシンポジウム。2日目は研究発表である。本会の研究発表(後述の例会も同じ)は発表時間が40分程度与えられるという点が特色である。短い時間(たとえば15分)の中で簡潔に、という考えもあるが、本会では十分な時間を取ってじっくりと、という考えで行っている。これは第1回以来の伝統である。大会は9月の最終週が恒例となっているので、本会の会員にとっては、その2週後に今度は日本中国学会の大会があるということになる。

例会。大きく東部と西部(中京・北陸以北)に分けて、それぞれに年2回、計4回の例会を行っている。土曜日の午後、3、4人の研究発表が行われる。会場は東京と関西が主であるが、これまでに北海道、金沢、名古屋、岡山、高松、広島、福岡、長崎、鹿児島などでも開催されている。

また、近年は外国の研究者との交流を目的として、特別例会として、2年に1回ほど、海外でも行っている。これまで、台湾の台湾大学で3回行ったが、今年(2011年)は初めて中国で、西安の西北大学において9月に行うことが決定している。

学会誌『和漢比較文学』の刊行。年2回(当初は1回)刊行している。第1号は198

5年10月刊、最新号は第45号で、2010年8月の発行である。

現在の会員数は600名強である。ちなみに年会費は3000円で、83年の設立以来、変わっていない。

上述の本会の事業において、中国文学研究者の参加をおおいでいるものがある。いずれも『和漢比較文学』掲載の論文で示すが、次のようなものがある。

- 6号(1990) 太田次男 漢籍旧鈔本に関する諸問題
 8号(1991) 岡村 繁 白楽天の詩賦と王朝の詩賦
 17号(1996) シンポジウム「白氏文集と平安文学」
 西村富美子 中唐以後の文学と平安文学
 34号(2005) シンポジウム「東アジアの中の白楽天」
 静永 健 経過報告及び総括
 下定雅弘 戦後日本における白居易研究
 36号(2006) 興膳 宏 空海と平安朝初期の漢詩
 40号(2008) 芳村弘道 唐詩の新資料・朝鮮本
 『夾注名賢十抄詩』をめぐって
 金 文京 東アジア比較文学の構想
 42号(2009) 小川陽一 鑑草と廻吉録
 44号(2010) シンポジウム「唐代伝奇と平安文学」
 諸田龍美 伝記と物語の美意識

いずれも、先立っての学会での講演、あるいはシンポジウムでの発表を原稿化したものである。特に近年はほぼ毎年といってもいいが、中国文学研究者の参加をお願いしている。

以上は学会本来の恒常的活動であるが、ほかに論集を刊行している。

学会設立からそれほど時間が経っていない時点であるが、日本漢文学研究の必要性を訴えることと研究を活性化させることを目的として、論文集の刊行が企画され、1986年から88年にかけて、「和漢比較文学叢書」が刊行された。汲古書院刊。「上代文学と漢文学」から「近世文学と漢文学」に至る時代別の巻に「和漢比較文学研究の構想」「和漢比較文学研究の諸問題」を加えた8冊である。この叢書は和漢比較文学学会の存在と日本漢文学研究の必要性を知らしめるに、その役割を果たしたといっていだらう。なお、聞くところによれば、出版社にとっても、この叢書はよく売れたものだったそうである。

これよりしばらく措いて1992年から94年にかけて、先の続編として、第2次の叢書が刊行された。今度は「古今集と漢文学」「説話文学と漢文学」など、代表的な個々の

文学作品、あるいはジャンルと漢詩文との関連をテーマとしている。それに「和漢比較文学の周辺」を加えた10冊である。この叢書にも、具体例は省略するが、それほど多くはないものの中国文学研究者による執筆がある。

和漢比較文学学会のこれまでの活動、および現在の活動のおおよそは以上のようなものである。

章炳麟シンポジウム 「第一回「東亜学術思想」 国際学術研討会…章太炎与晚清 中国学術」に参加して

一橋大学
坂元ひろ子

2010年12月21-22日、「第一回「東亜学術思想」国際学術研討会:章太炎与晚清中国学術」が香港城市大学、中文・翻訳及語言学系主催、東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)協賛で開催された(プログラム:http://zhangtaiyan.citl.cityu.edu.hk/ZTY_schedule.html)。会場は1995年に開設され、九龍に高層ビルを含む現代的なキャンパスを有する香港城市大学。この新しい大学で同大学の張隆溪教授らの協力を得て会議の組織を中心的に担ったのは、日本文学を研究し、『「修辞」という思想——章炳麟と漢字圏の言語論的批評理論』(白澤社, 2009)刊行後、2010年早春まで東京大学教養学部で教職にあり、転任したばかりの林少陽氏。林氏は東京時代、数人規模ながら章炳麟研究会を結成、それが原点となって同大学初の「普通語」によるこの国際会議が構想され、実現したという。近隣の大学から傍聴に来た院生も多かった。

著名な革命家・思想家・学者ながら、ひとつには晩年、「赤化」に反対したという政治的な理由が大きいのであろうが、章炳麟を主たる対象とする討論会の開催は決して多くない。林氏の調査によると、1986年、杭州での「章太炎先生

逝世五十周年記念暨学術討論会」、1989年、香港大学中文系での小学関係の章(太炎)黄(侃)学術研討会、1998年、台湾、中国文化大学中文系での「章太炎与近代中国学術研討会」、2001年、杭州・海寧での「章太炎黄侃先生記念会及国際学術研討会」で、これには私も参加した。天安門事件を経た90年代からの「学術史研究」熱で陳寅恪とともに章炳麟への評価も高まっていたことが背景にあったろう。

今回は中国・香港・台湾、ドイツ・カナダ・日本からの発表者19名(うち、基調講演者の一人、朱維錚氏は入院のため欠席、唯一のヨーロッパからの発表予定者、A・シュナイダー氏は折からの大雪による空港封鎖のため論文参加)、討論者を加えても小規模ではあった(写真1)。だが、政治的なアジェンダとも関わる記念事業的なものや、『民報』期の革命論にその意義を限定しようとするものとも性格を異にし、清以降の思想学術史における、仏教との関係も含めた章炳麟思想に正面から向き合うものであった。日本での国際的研究交流が機縁となってこれが実現したことは、日本の研究者としても感慨深いものがある。



写真1 右から10人目が汪榮祖氏、左から2人目が林少陽氏。

実はこのシンポジウムについてはすでに、章炳麟研究会の一員でもある石井剛氏(東京大学)によって英文の報告文がUTCPのホームページhttp://utcp.c.u-tokyo.ac.jp/blog/index_en.phpに掲載されている。報告者全員の発表について要領よく言及されているので是非、あわせ読んでいただきたいのだが、それから、企画段階から文学・歴史・哲学と漢語という書記言語の関係に対する強い関心に支えられていたことがわかる。張昭軍氏(北京師範大学)が章炳麟に前近代史の道德性と近代科学性の結合を、林氏が章炳麟と魯迅の内在的連関性を「狂狷」(『論語』)に見いだしたことも表れたように、そのような関心からして章炳麟は恰好の研究対象となりうることは疑いがない。

基調報告者として招聘されたのは、つとに康有為と章炳麟、胡適と陳寅恪を主対象として、「中国の富強と世界の大同」を追求する歴史として中国近代をみしてきた著名な学者、汪榮祖氏(台湾国立中央大学)である。長いアメリカでの教

国際ワークショップ 「現代中国における儒教復興」 —フィールドからの調査報告— 参加記

東京大学
水口 拓寿

中国大陸、香港や台湾などでは、「儒教」「儒学」或いは「儒家」の「復興」現象が近年著しく、当該地域内外の研究者がこの問題に関心を向ける程度も、年を追って高まりを見せている。こうした状況の中にあつて、本ワークショップ

は東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)が主催し、フランス現代中国研究センター(CEFC)が共催して執り行われた。蔣経国国際学術交流基金会〈台湾〉の助成による国際研究プログラム“The Confucian Revival in Contemporary China: Forms and Meanings of Confucian Piety Today”の活動報告であることも申し添えておく。日程は2010年12月3日(金)、場所は東京大学駒場キャンパス18号館、使用言語は英語と中国語であつた。本ワークショップは、2008年3月に東大駒場で行われた国際ワークショップ「中国伝統文化が現代中国で果たす役割」の続篇的性格を持ち、同じくUTCPとCEFCの両機関によって共催されただけでなく、発表者や司会者の顔ぶれにも多分の重複があつた。2008年のワークショップは、その成果が同名の論文集にまとめられており(中島隆博編、UTCP Booklet

5、2008)、UTCPのウェブサイトで全文が公開されているので、詳細はそちらをご覧ください。

今回のワークショップは、UTCP拠点リーダーである小林康夫氏のスピーチによって幕を開け、引き続き“The Confucian Revival in Contemporary China”プログラムを代表して、Sébastien Billioud氏(パリ第7大学〈フランス〉)が開催趣旨の説明が行われた。この後、全部で5つのセッションが順次進められたが、第1セッションではBillioud氏の司会のもと、干春松氏(中国人民大学)が「知識和信仰的分途—近代社会变革中儒学的宗教化和知識化的争論」と題して、陳壁生氏(同)が「潮汕民間的儒教復興—以潮陽蕭氏祠堂“四序堂”為例」と題して発表された。干氏はかつて康有為が推進した「儒家の教会化と知識化」を、現代における「儒家」の苦境を生み出したものという観点から論じられた。陳氏は「城市祠堂」と呼ばれるタイプの施設に注目され、広東潮汕地方における実地調査に基づいて、「儒教復興/儒学復興」の潮流の中で祠堂の文化的・社会的役割に生じた変化を読み解かれた。

第2セッションでは王守常氏(中国文化書院)の司会のもと、石井剛氏(東京大学・UTCP)が“Today’s Confucianism and Cultural Diversity in Northeastern China(文化多様性中的当代儒家:以中国東北為例)”と題して発表され、また筆者が「吉林省長春文廟与其祭孔活動的『復興』」と題して発表した。石井氏は吉林省長春市・吉林市における孔子廟の現況に関する実地調査、及び東北師範大学で行われた意見交換会の経験を踏まえ、中国大陸の多層的な「儒家復興熱」を総体として把握するための視野・方法・概念を問われた。筆者は、長春文廟と吉林文廟における祭孔行事の構成やそこで用いられる衣冠・音楽などを分析し、孔子廟という装置を通して表現される「儒学復興」のひとつのあり方を論じた。

第3セッションでは干氏の司会のもと、王見川氏(南台科技大学〈台湾〉)が「当代中国西南地区儒教活動—以雲南洱源為考察中心的田野報告」と題して、鍾雲鶯氏(元智大学〈台湾〉)が「信念与信仰—儒教在雲南發展的現況考察」と題して発表された。王氏・鍾氏ともに雲南での実地調査に基づき、孔子廟などの伝統的な儒教施設以外の場に根付いた、民間の宗教施設・宗教団体における「儒教」的な信仰要素や孔子祭祀のプラクティスなどについて

て、豊富な調査事例を挙げながら論じられた。

第4セッションでは中島隆博氏(東京大学・UTCP)の司会のもと、Joël Thoraval氏(国立社会科学高等研究院<フランス>)が“On ‘Minjian’ Confucian Initiatives in Education and Religion: A Brief Report from the Field in Shanxi Province”と題して、Billioud氏が「教育的角色在一貫道の救世使命中(The Role of Education in Yiguandao’s Salvationist Mission)」と題して発表された。Thoraval氏は山西における実地調査を踏まえながら、「現代の儒学は『さまよえる亡霊』である」という余英時氏の見解に言及され、これに対する柔軟な再考を促された。Billioud氏は香港・マカオでの実地調査に基づき、一貫道における「読経」(「儒家經典」を読み学ぶこと)や「中国伝統文化」の教育・教化の現況、及び一貫道の教義におけるその位置付けについて論じられた。

第5セッションではThoraval氏の司会のもと、Anna Sun氏(プリンストン高等研究所・ケニヨン大学<アメリカ>)が、“The Religious Ecology of Confucius Temple Life”と題して、Guillaume Dutournier氏(コレージュ・ド・フランス)が、“Family Schools in China and Taiwan: Three Perspectives on a Traditionalist Education(当代中国大陆与台湾的家庭教育組織—考察伝統主義教育的三個視角)”と題して発表された。Sun氏は伝統的に官による儀礼の場であった孔子廟が、近年の中国大陆や台湾において個人的な祈願(入試合格など)や、そのための儀礼挙行やグッズ販売の場という性格を帯びつつあることを、多数の孔子廟における実地調査に基づいて論じられた。Dutournier氏は、「儒家經典」を主要な教材とする中

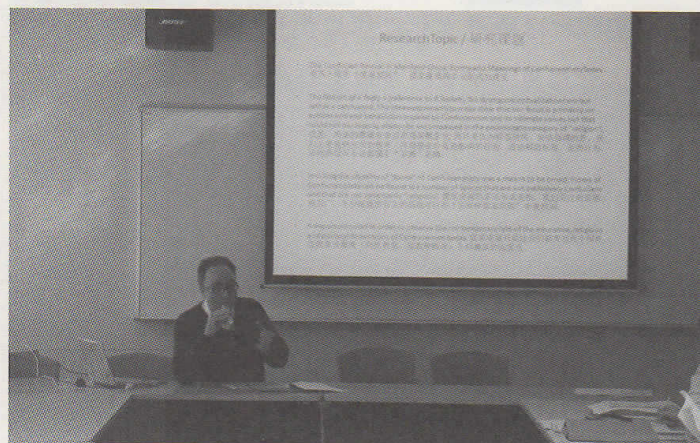
国大陸の「私塾」と台湾の「読経班」に関する実地調査に基づき、義務教育制度との摩擦も辞さないこれらのホームスクーリング施設について、政治学・社会学・人類学の方法を用いて多角的に検討された。この後に列席者全員による総合討論が行われた。

中国大陆・台湾・フランス・アメリカ・日本の研究機関から集まった、思想文化学・歴史学・政治学・社会学・人類学など多彩なバックグラウンドを持つ計12名の発表者・司会者に、アメリカ・日本の研究機関に属する参会者を交えた本ワークショップは、かくして盛会の裡に締めくくられた。“The Confucian Revival in Contemporary China”プログラムは、来年に中国大陆で総括的なワークショップ或いはシンポジウムを行い、更にプログラム全体の成果を論文集として世に問う計画であると聞いている。筆者は、今回発表の機会を与えて下さった同プログラムが実り多いゴールを迎えることを祈念するとともに、2度にわたって東京で開催されたワークショップを機に、広く東アジアにおける儒教・儒学・儒家の「復興」という興味深いテーマに対して、日本の研究者の関心が一層深まってゆくことを、また一方で、こうしたテーマをめぐる日本の研究者の動向が海外の学界で注目を得てゆくことを、その末席を汚す者として期待したいと思う。

※文中では敢えて繁雑を避けず、各発表者の用語法に従って「儒教」「儒学」「儒家」の3語を使い分けた。“Confucian revival”という現象に対する発表者の認識を反映して、こうした違いが生じた場合もあろうし、或いは“Confucian revival”の当事者による語彙の選択を、そのまま反映した場合もあるだろう。



儒教ワークショップ参加者



セバスティアン・ビリュー教授(パリ第7大学)の報告

「香港..都市想像與文化記憶」 国際研討会に参加して

山
口
守

日本
大
学

2010年12月香港で行われた「香港:都市想像與文化記憶」国際研討会(12月17日香港中文大学、18日香港教育学院)は、香港文化・文学を討論する一回性のシンポジウムではなく、第一回2003年北京、第二回2006年西安と続く

「都市想像與文化記憶」シンポジウムの第三回として香港で開かれたため、メインテーマに開催地香港を冠している。その経緯を考えれば、本来地域の固有性より都市文化そのものが中心的論題となりそうだが、香港が都市文化抜きには論じられない“固有性”を持っていることもあり、実際には香港文化に焦点化した研究発表が殆どであった。ただ東アジアにおいて香港ほど土着文化で論じることが難しい場所は他になく、結局のところ都市としての香港の歴史、政治、文化的文脈をめぐる討論に収斂していくのは必然的であった。

地元香港及び中国内地の研究者に加え、マレーシア(10名)・韓国(9名)・アメリカ(6名)・台湾(5名)・日本(1名)と海外参加者がいたが、後述するように中でもマレーシアからの参加者の発表が印象に残った。二日間にわたって三つのセッションが同時進行、全84名が研究発表を行うという大

規模なシンポジウムの開催の中心となったのは陳平原(香港中文大学、北京大学との兼任)、陳国球(香港教育学院)、王德威(ハーバード大学)の三氏で、それぞれの所属大学の名義で今回のシンポジウムが企画・実行された。サブテーマとして「清末以降香港の文化・社会生活、建築風格、言語変遷」、「清末以降現出した“香港”」、「思想主体及び表現対象としての“香港人”」、「植民地、脱植民地、後植民地状況と“香港叙述”」、「メディア、テキストにおける香港及び他都市の関係の想像」が掲げられていたが、個人的には香港の固有性を想定する前二点よりも、歴史、政治、文化的文脈の中で香港を考えようとする後三点の方が興味深かった。それは二人の研究者の基調講演内容とも関連する。まず開幕式の直後に王德威が「文学的香港史:十個關鍵時刻」と題して、1929年から21世紀に至るそれぞれの時期の香港を象徴する作家、張愛玲、金庸、劉以鬯、李碧華らを取り上げて、文学が描き出す時代と文学を生成する場としての時代の相互関連を時系列的に解説したが、そこで言われている香港とは固有の都市というより都市の時代的文脈のことであったように思う。更に午後の記念講演で、ハーバード大学で王德威の前任者であった李欧梵(香港中文大学)が、City Between Worlds(Leo Ou-Fan Lee, Harvard University Press, 2010)執筆の時の経験に触れながら、英語世界における香港研究の現状を紹介する一方、中国語世界における香港研究の立ち遅れを批判する立場を述べたが、そこでも香港研究とは複数の世界に挟まれた都市香港を想定した「場」の研究とし措定されているように感じた。

こうした立場をより具体的、より明確に論じたのは、主催者の一人陳平原の「我見青山多嫵媚——葉靈鳳、李欧梵的“香港書写”」と題した発表だった。抗日戦争期に葉靈鳳のように内地から香港へ逃れた「南来」作家や、李欧梵のように香港返還(中国語で「回帰」、英語で“hand over”とそれぞれに政治的立場が表れているが)を機に欧米から香港へ移住した「東帰」学者など、外部から香港へ移り住んだ人間が描く香港にこそその特徴が見事に表現されている点を指摘し、歴史の縦軸と時代の横軸を見据えた香港論を待望する発表だったが、記憶の歴史性と想像の同時代性を強調したその立場が今回のシンポジウムの狙いを示しているように思える。個人的にも香港がある時代において何かを表象する場であったことは体験

とである。但し組織・運営はすべて北京語言大学語言研究所のスタッフによって遂行された。

発表論文は51篇。うち11篇が全体会議での報告。発表順に、大西拓一郎、Richard Simmons(アメリカ)、Olga Zavyalova(ロシア)、遠藤光暁、洪惟仁、曹志耘、岩田礼、張振興、項夢冰、游汝杰、潘悟雲。他の40篇は2つの分科会で発表された。日本から参加した太田斎、石汝杰、胡士雲、劉勳寧、沈力、松江崇、新田哲夫の諸氏の発表もそこに含まれる。会議は二日とも朝の8時から午後6時まで続いた。事前にプロシーディングズが配布されたが、現在、論文集刊行に向けて準備が進んでいる。うち何篇かは事前に北京語言大学『語言教学與研究』誌に掲載される予定と聞く。

さて“地理語言学”とはなにか？日本や欧米で“言語地理学”(linguistic geography)又は“方言地理学”(dialect geography)と呼ばれてきた研究に近いが、事は単に“言語”と“地理”の語順を替えたというにはとどまらない。つきつめれば、中国の方言研究は何をめざすべきかという根本問題に行き着く。

言語地理学は、1902世紀ヨーロッパ言語学を席卷した比較方法に対する反動として生まれた。“音韻法則”なる用語に代表されるように、比較方法は言語変化の法則性を主張した。ところが、一語一語の地図を作製してみると、「法則性は至る所で破壊されている」。こう主張したのは、『フランス言語地図集(ALF)』(1902~10)の著者Jules Gilliéron(ジリエロン)であった。ジリエロンをはじめとする西欧の言語学者たちが力を注いだのは、民衆の言葉がなぜ、どのように変化していくか、そのメカニズムの解明である。日本では柳田国男「蝸牛考」(初版1927年)と“周圏論”がよく知られている。また1938年には松原秀治によってAlbert Dauzat(ドーザ)『フランス言語地理学』が翻訳されている。戦後、Willem Grootaers(グロータース)神父が来日し、国立国語研究所『日本語地図』(1966-1974)の編纂に決定的な影響を与えたが、受容のための条件はすでに整っていたのである。

中国における言語地理学の実践は、グロータース神父が山西省大同地域の教会に赴任した1941年に始まった

中国の方言研究は なにをめざすか？

——「首届中国地理語言学暨中日方言
保存利用国際学術研討会」報告

岩田 礼
金沢大学

昨年11月21、22日、北京語言大学(西郊賓館)において表記の国際シンポジウムが開催された。中国では2008年11月に曹志耘主編『漢語方言地図集』(商務印書館)が出版され、地図又は地理情報を用いた方言研究の機運が高まっている(岩田礼『漢語方言地図集』と曹志耘さんのこと『東方』338期、2009年4月参照)。本会議はこのような状況を背景として開催された。主催機関は北京語言大学と金沢大学。また“首届中国地理語言学国際学術研討会”というシンプルなタイトルではなく、“中日方言保存利用”(日中両国方言の保存と活用)が挿入されているのは経緯がある。金沢大学は2007年度から文部科学省の補助を受けたプロジェクト「日中無形文化遺産連携融合事業」を展開しており、その柱の一つに、『漢語方言地図集』の編集、出版への協力があつた(<http://heritage.lt.kanazawa-u.ac.jp/>参照)。私達と語言研究所との協同は、過去4年間様々な形で続いている。二人の日本語方言研究者、大西拓一郎氏(国立国語研究所)、新田哲夫氏(金沢大学)が参加したのも、交流実績をふまえてのこ

(岩田礼・橋爪正子訳『中国の方言地理学のために』好文出版、1994)。当時の中国では、趙元任をリーダーとする中央研究院歴史語言研究所によって方言調査が進められていたが、グロータース神父の「漢字の発音ではなく、民衆の生きた言葉を調査すべし」との主張は、趙元任らにも強いインパクトを以って受けとめられていた(董同龢『華陽凉水井客家話記音』趙元任前言)。しかしその後の方言研究においてグロータースが表舞台に再登場したのは、やっと2003年、石汝杰・岩田礼訳『漢語方言地理学』(上海教育出版社)である。

私たちは1989年以来、日本国内で方言地図作成と一語一語の歴史を再構成する作業を続けてきた。その成果の一部は2009年12月に『漢語方言解釈地図』(白帝社)として出版された。しかしこのような“言語地理学”(“グロータース流言語地理学”又は“狭義の言語地理学”と呼ばれている)が中国の言語学界で市民権を得たとは言い難い。今回の会議でも、「中国方言学は揚雄『方言』以来の伝統を継承すべし」(張振興氏)、「漢語方言地理学はグロータース流方言地理学を排斥しないが、調査と研究の系統性を重視し、グロータース流を超脱すべきである」(項夢冰氏、下線は筆者)といった発言があった。“系統性”とは、一語一語の歴史を研究するのではなく、音韻、語彙、文法の全体を調査、研究することと解されるが、行き着くところは法則性の重視と方言の分類・区画なのだろうと思う。

しかし多くの発表は、或いは『漢語方言地図集』、或いは狭域方言地図を素材として、そこに現われた分布をどのように解釈するかを熱心に論じていた。それらの多くは若手によるものであったが、侯精一先生のような長老も語形の類型化と地理的分布の観察という言語地理学の常道を実践されたのには驚いた。昨年「一枚の地図で一本論文が書けるよ」と語っていた趙日新氏は、“歩く”と“走る”の全国地図を例として公約を果たした。江蘇省東北部方言をかつてともに調査した畏友蘇曉青氏は、私の知らないうちに多くの調査を実行し、方言境界線の位置が行政境界線と一致する例を報告した。甘于恩氏の報告によって、広東省では省レベルの詳細方言地図が一部

完成していることを知った。台湾から参加した洪惟仁、張屏生、李仲民の三氏は、いずれも徹底してフィールドワークベースの議論を展開した。曹志耘氏と王莉寧氏は、それぞれ『漢語方言地図集』から帰納される“分布の型”(“南北対立型”、“東西対立型”、“長江流域型”等)を論じた。言語データの電子化、データベースの構築に関しては、潘悟雲氏が地図作成ソフトも組み込んだ巨大データベースを、また劉祥柏氏、王文勝氏はそれぞれ音声付きのデータベースを紹介した。方言分布を地理情報(GIS)と結合させて論じた沈力氏の報告は迫力があつた。これら様々な研究潮流が一堂に会して議論したことは画期的であり、我々が日本で共同研究を始めた20年前に比べると、まさに隔世の感があつた。閉会式での石汝杰氏の全体総括はそのような私の感慨を代弁してくれた。

最後に分科会での一つの発表、劉艶「漢語方言中的“俗語源”」に言及したい。劉さんは石汝杰先生のお弟子さんで、熊本学園大学に留学中である。山西省文水県ではテントウムシが「送飯盔盔」又は「送飯罐罐」と呼ばれている。これは元々、繁忙期の農民が弁当箱代わりに畑に持参した壺を指す語であつた。それがテントウムシの呼び名となったのは、両者の形状が似るためである。「それがどうした?」と言われかねないようなことではある。しかしそれを敢然と発表した勇氣に私は感銘を受けた。中国における言語地理学の命運は、このような研究を“学問”と認めるのか、それとも「大学で教育を受けた農民の子弟は、ほとんどが書物の魅力にとり憑かれて農村のことなど忘れてしまうという残念な現実」(グロータース)が繰り返されるのか、にかかっている。幸い、曹志耘氏らは次なる大規模調査を計画している。即ち方言語形が指し示す事物を調査する“方言文化調査”の計画である(http://www.chinadialect.com/info_view.asp?id=524 参照)。方言語彙とその変化は民衆の事物に対する認知形態を反映している。それは今をときめく認知言語学よりはるか以前に、ジリエロン、柳田国男などの先達が取り組んだ課題であつた。

国内学会消息 (平成二十二年)

◎ 北海道中国哲學會

○例會

2月5日

- 『荀子』の思考と「類」 關村博道
- 『論衡』の研究—王充の意圖を探る— 河村真知子

3月1日

- 陽明後學研究新加坡南
洋理工大學助理教授 魏 月萍

4月23日

- 兩岸中國學の現在
北海道大學大學院専門研究員 江尻 徹誠
北海道大學大學院専門研究員 西信 康
北海道大學大學院専門研究員 大野 裕司

5月28日

- 唐君毅・牟宗三的陽明後學研究
臺灣中央研究院中國文哲研究所研究員 林 月惠

7月2日

- 中國古代の占い—出土術數文獻から見た中國古代の生活と文化—
北海道大學大學院専門研究員 大野 裕司

10月29日(卒論構想發表會)

- 欲望社會と「聰」「明」について—『莊子』胠篋篇・駢拇篇と『列子』楊朱篇を手がかりとして 大胡 田悠
- 『黄帝内經』の五味について 愛 須恵
- 『韓非子』における説得論 佐々木春奈

11月5日(卒論・修論構想發表會)

- 吉田松陰の『孫子評注』研究 高松 敏之
- 『宋本十一家注孫子』用間篇研究—注釋に引かれた故事を中心として 松島 愛
- 縦横家江乙の研究 猪瀬 昌

12月2日

- 日立建機の中國事業展開
日立建機株式會社元人材開發センター長 中山 潤一

平成23年1月28日

- 山鹿素行の王霸論と義利論について 張 捷
- 郭店楚墓竹簡『性自命出』の研究
北海道大學大學院文學研究科専門研究員 西信 康

○研究發表大會

第四十回研究發表大會竝總會 7月30日 於人文・社會科學總合教育研究棟W501

(研究發表)

- 『孟子』萬章下に見える「集大成」について 和田 敬典
- 『奇門遁甲千金書』について 猪野 毅
- 從《西方合論》看袁宏道的淨土觀 張 岱
- 『墨子』の「非攻」と胡適 胡 惠君
- 江戸時代における『朱子家禮』の受容—若林彊齋『家禮訓蒙疏』を中心として— 吳 明熙
- 佐藤一齋『論語欄外書』への批判書

横濱市立大學准教授 小幡 敏行
(近藤 浩之 記)

◎ 中国語中国文学談話會

○第227回 平成22年5月29日

- 「万里長城」はなぜ「ワンリー長城」なのか— 社会科地図帳の中国地名表記に目撃せる怪現状
中京大学国際教養学部教授 明木 茂夫

○第228回 平成22年6月26日

- 上古漢語の指示詞について 山田 大輔
- 賈平凹の小説芸術
広西師範学院文學院副教授 黄 世権

○第229回(留学帰国報告會) 平成22年11月6日

- 長拳〜どんな敵だってこわくない! 中原 愛弓
- 我是爱京剧的!〜私の天津京劇生活(ライフ)〜
高柳 美咲

○第230回 平成23年1月29日

- 閻魔様からの告白—ただ、カボチャが欠けている 毛 文
- 犬のイメージの変遷について 吳 秀娟
- 天女から僵尸へ—早魃のイメージの変遷について

- 劉 傑宇
- 清末妓女と上海都市空間 周 軍

○第231回(卒業論文発表會) 平成23年2月16日

- 中国鬻髻譚考〜甦る鬻髻〜 久保田 歩
- 朝志怪中の蛇郎譚 長谷川奈月

○第232回 平成23年年3月20日

- 皮五辣子(ピーウラーズ)—文化としての物語—
北海道大学大学院文学研究科教授 須藤 洋一
(加部 勇一郎 記)

◎ 東北中国学会

第59回大会 5月29日、30日

第1日 於弘前大学創立五十周年記念会館

[研究発表]

- ・「小説『劉志丹』事件の歴史的背景とその展開」
石川 禎浩
- ・「『詩経』古注(毛伝・鄭箋・毛詩正義)における順序意識の意味するもの」
田中 和夫

[公開講演]

- ・「明末清初、松江府の士人、陳子龍における王朝国家と地域社会」
森 正夫

第2日 於アソベの森いわき荘

第1分科会

- ・「『民則』に狎れる神々―「民」と「神」の関係に着目して―」
高戸 聡
- ・「『後漢書』南蛮伝に見える槃瓠伝説の系譜について―『搜神記』との比較から―」
三津間弘彦
- ・「笑う教示者―楚辞「漁父」の解釈をめぐる―」
矢田 尚子
- ・「『有』『無』の諸相―生成論における「道」の記述―」
高橋 睦美
- ・「安世高と後漢の思想」
清水 浩子

第2分科会

- ・「東晋劉宋期の皇太妃と皇太后」
三田 辰彦
- ・「北魏前期の部族統治制度」
松下 憲一
- ・「南朝禅譲革命における揚州刺史・揚州牧の意義」
伊藤 侑希
- ・「唐代の遷葬」
江川 式部
- ・「康熙帝の親近集団とその構造」
角谷 祐一

◎ 秋田中国学会

○平成22年度春季秋田中国学会第150回例会

5月22日(土) 於秋田大学総合研究棟二階講義室

- ・ 中庸テキストにおける「孔子の思想」の展開とその体系化について
佐藤 弘理
- ・ 漢長安城内の樓閣台遺跡について
内田 昌功

○平成22年度秋季秋田中国学会第151回例会

11月27日(土) 於秋田大学総合研究棟二階講義室

- ・ 中国近況―最近の渡航の見聞から―
内田 昌功

- ・ 春秋経の成立メカニズムについて―哀公期春秋左氏経・伝の分析を中心に―
吉永慎二郎
(吉永慎二郎 記)

◎ 東北シナ学会例会

○2月例会 2月16日

(卒業論文・修士論文発表会、中国思想・中国文学分野のみ抜粋)

[卒業論文発表会]

- ・ 対偶表現から見た『老子道德経』
関場 美紀
 - ・ 『悟真篇』の思想―翁葆光注を手がかりに―
金子 由佳
 - ・ 黄宗羲の思想―康熙十五年以降の学問活動と学問観を中心に―
豊島ゆう子
 - ・ 清代李塨『詩経傳註』における解釈について
小松崎宏明
 - ・ 『聊齋志異』の幽鬼について
土田かおり
 - ・ 村上春樹『ノルウェイの森』の中国語訳版本研究―兩岸三地の翻訳の比較―
芳賀未来恵
 - ・ 台湾語における世代間、地域間の発音の差異に関する研究
岡島 邦矩
- 4月例会 4月17日
- [新入生歓迎会]
- ・ 蔡京傳説、司馬光神話
熊本 崇
(矢田尚子 記)

◎ 東北大学中国哲学読書会

第165回中哲読書会 7月23日

[修士論文構想発表会]

- ・ 伊藤仁斎『忠恕』再考
宣 芝秀

第166回中哲読書会 11月6日

[卒業論文構想発表会]

- ・ 『天主実義』における中西問答について―西士利瑪竇の立場を中心に―
中島 彰宏
- ・ 戴震の思想―孟子字義疏證における欲望と秩序―
佐藤 里奈
(高橋 睦美 記)

◎ 東北大学中国文学談話会

平成22年度 第1回中国文学談話会 7月27日

[卒業論文構想発表会]

- ・ 『搜神記』における死後の世界について
渡邊 涼子

- ・ 武部利男『白楽天詩集』についての一考察 —異なる文化間での翻訳比較を通して— 吉田 有希
- ・ 『龍図公案』と『律条公案』との類話の差異について 堀川 慎吾
- ・ 名詞連接表現における「の」と「的」の対応関係 中村 直矢
- ・ 翻訳漫画にみられる中国語オノマトペについて 櫻井 彩

平成22年度 第2回中国文学談話会 11月6日
[卒業論文中間発表会]

- ・ 『白楽天詩集』における武部利男訳についての一考察 吉田 有希
- ・ 中国語の名詞連接表現における「的」について 中村 直矢
- ・ 台湾の翻訳漫画にみられる中国語オノマトペの諸相 —台湾版『ハチミツとクローバー』を資料として— 櫻井 彩
(矢田 尚子 記)

◎ 筑波中国学会

○例会

- 5月27日(木)
- ・ 陶淵明詩文に於ける「遠」字について 加藤 文彬
- 6月17日(木)
- ・ 『聊齋志異』における「痴」の物語について 高橋 恒輔
- 9月16日(木)
- ・ 李白研究——李白詩における「白鷺」の存在意義 逆瀬川 彰子
- 9月30日(木)
- ・ 朱熹『詩集伝』における引用と「未詳」の注について 重野 宏一
- 11月18日(木)
- ・ 王漁洋の「和韻李清照漱玉詞」について 荒井 礼
- 12月9日(木)
- ・ 『史記』趙世家の趙氏孤児説話に関する一試考 花岡 亜希

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第29号(10月) (稀代麻也子 記)

◎ 中国文化学会

○例会

- 3月6日(土) 於大妻女子大学
- ・ 『三虞堂書画目』の資料的価値について 筑波大学博士特別研究員 下田 章平
- ・ 杜牧と韓愈・柳宗元の兵戦観 筑波大学 高橋 未来
- 5月1日(土) 於大妻女子大学
- ・ 李贄『老子解』攷 筑波大学 堀池 信夫
- 9月18日(土) 於大妻女子大学
- ・ 「桃花源記」の「問津」について 大妻女子大学 松村 茂樹
- ・ 方法としての自虐—庾信「擬詠懷詩」再読 青山学院大学 大上 正美
- 12月11日(土) 於大妻女子大学
- ・ 杜牧の『注孫子』における『通典』の影響について 筑波大学 高橋 未来
- ・ 元結の「新楽府」について 千葉大学 加藤 敏

○大会

- 6月26日(土) 於長野県短期大学
- [研究発表]
- ・ 冬を詠う賦をめぐって—雪と氷の描写をめぐって— 二松学舎大学研究生 小嶋明紀子
- ・ 晩唐・韋荘における杜詩の影響 函館工業高等専門学校 鳴海 雅哉
- ・ 顧炎武の考拠と経世—郡県をてがかりとして— 文教大学 渡邊 大
- ・ 『説文解字』データベースソフトについて 上智大学 高橋由利子
- ・ 李商隱の詩歌と道教との関係—内観存思のさまを描いた詩 横浜市立大学 加固理一郎
- ・ 『イソップ物語』の日本と中国 東京女子大学 安藤 信廣
- ・ 「論語鄭玄注」は日本に将来されたか 東京外国語大学名誉教授 高橋 均

[シンポジウム]

- 「近代における日中文化交流の再検討」
パネリスト (兼司会) 文教大学 阿川 修三
二松学舎大学 佐藤 一樹
大妻女子大学 松村 茂樹

○刊行物

『中国文化』第67号(6月)
(阿川 修三 記)

● 六朝学術学会

○例会

第21回研究例会 3月20日 於二松学舎大学

[報告]

- ・ 漢魏六朝文学における“頌”について
神戸大学大学院 林 暁光
- ・ 芻蕘と逸民
東北学院大学 塚本 信也
- ・ 唐代詩論書から見た六朝詩人と六朝文学——皎然『詩式』を中心に
國學院大学 赤井 益久

第22回研究例会 11月20日 於二松学舎大学

[報告]

- ・ 芳りと響き——二陸の詩歌作品に見える感覚表現の一斑
相模女子大学 狩野 雄

[特別企画：自著を語る]

- ・ 『六朝の文学 覚書』
神戸女子大学名誉教授 林田慎之助
- ・ 批評「掘りかへし耕しなほす時——『六朝の文学 覚書』を読んで」
青山学院大学 大上 正美

○大会

第14回大会 6月13日 於斯文会館

[研究発表]

- ・ 東晋の「皇太妃」号議論とその展開
東北大学大学院 三田 辰彦
- ・ 沈約の隱逸観と文学
茨城キリスト教大学非常勤講師 北島 大悟
- ・ 初唐期九月九日詩における陶淵明の影響
和光大学 佐野 誠子
- ・ 唐朝六大服飾体系の成立過程——六朝隋唐における礼制の変容と他文化受容
埼玉大学 小林 聡
- ・ 徐淑小考——文学テキスト上の性差をめぐって
山形大学 福山 泰男

[記念講演]

- ・ 〈可道〉と〈常道〉——『老子』第一章の読みをめぐって
筑波大学 堀池 信夫

○刊行物

『六朝学術学会報』第11集(3月末日)
(平井 徹 記)

● 日本聞一多学会

◆大会

日本聞一多学会創立記念大会
2010年12月4日(土)13時~17時半

○特別講演 陳国恩「中国における聞一多研究」

○シンポジウム

第一部 聞一多と近代学術

- ・ 聞一多の「賈島」と賈島研究の今日的課題
松原 朗(専修大学)
- ・ 聞一多と郭沫若における『詩経』
横打 理奈(東洋大学・研究員)

第二部 聞一多と近代文学

- ・ 聞一多『詩的格律』材源考 鈴木 義昭(早稲田大学)
- ・ 日本における郭沫若研究 岩佐 昌暲(熊本学園大学)
- ・ 徐志摩とバートランド・ラッセル
加藤 阿幸(清和大学)
- ・ 聞一多と沈從文 福家 道信(近畿大学)
- ・ 中国における郁達夫研究 大久保洋子(産経新聞)
(司会：牧角 悦子 二松学舎大学)

◆刊行物

『神話と詩』第9号(2010年12月)
(野村 英登 記)

● 国士館大学漢学会

○第45回大会 10月8日

[学生発表]

- ・ 3年次生卒論計画発表
- ・ 大連短期語学研修報告 矢澤絵里奈 他

[特別講演]

- ・ 「直方大」 国士館大学名誉教授 廣野 行甫

○刊行物

『國士館大學漢學紀要』第12号
(鷲野 正明 記)

● 日本漢文小説研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館

5月30日

- ・ 今年度の活動について

7月18日

- ・ 藍沢南城「猴醸記」「蜃楼記」について 内山 知也

10月17日

- ・ 『明治開口新語』について 荒井 禮

12月19日

- ・ 三木愛花『南総美談復仇実記』について 荒井 禮
(鷲野 正明 記)

● 明清文人研究会

○月例研究会 於湯島聖堂斯文会館応接室

3月14日(日) 午後15時~17時

[特別講演会]

会長挨拶 筑波大学名誉教授 内山 知也

講師紹介 早稲田大学教授 内山 精也

「明遺民與仕清漢官之交往」

四川大学中文系講師 李 瑄

「閩詩傳統在明代的形成與展開」

復旦大学中国古代文学研究中心教授 陳 広宏

4月29日(木)

周道振・張月 尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社

2002年発行「年表」読解

6月20日(日)

周道振・張月 尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社

2002年発行「年表」読解

9月19日(日)

周道振・張月 尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社

2002年発行「年表」読解

11月14日(日)

周道振・張月 尊輯校『唐白虎全集』中国美術学院出版社

2002年発行「年表」読解

(河内 利治 記)

● 早稲田大学中国文学会

○第35回春季大会

6月19日(土)於早稲田大学文学部第一会議室

・ 広東語の母音の長短について 馬 之濤

・ 「窓」の風景 — 謝朓詩に見える「窓」表現— 石 碩

・ 『紅樓夢』における海棠 — その描写の表すもの— 渋井 君也

・ ケンブリッジで考えたこと—主観的基準からの偏差とことばの情報処理— 楊 達

○第35回秋季大会

11月27日(土)於早稲田大学文学部第一会議室

・ 上古音研究と出土資料—声母を中心として— 野原 将揮

・ 蔡卞『毛詩名物解』の名物考証について 原田 信

・ 山西省楊忠武祠の石碑と楊家将の系譜—楊家将故事発展との関わりから— 松浦 智子

・ 革命と恋愛の方程式—蔣光慈『衝出雲圀の月亮』の試みと挫折—

小川 利康

(岩田 和子 記)

● 宋詞研究会

○『唐宋名家詞選』訳注検討会

9月11日(土)、12日(日) 於東海学園大学

・ 竜榆生編『唐宋名家詞選』の訳注および検討

○小風絮会(『唐宋名家詞選』訳注)

1月30日(土)至11月6日(土)

於立命館大学文学部中国文学専攻共同研究室

・ 竜榆生編『唐宋名家詞選』の訳注および検討

○刊行物

施蟄存著、宋詞研究会訳注『詞学の用語—「詞学名詞釈義」訳注』、汲古書院(3月)

『風絮』第六号(3月)

(萩原 正樹 記)

● 宋代詩文研究会

一、『橄欖』第17号の刊行

二、第14回宋代文学研究談話会

5月22日 於大阪大学

① 嚴州における陸游『劍南詩稿』の刊刻について

九州大学大学院 甲斐 雄一

② 劉辰翁「廢科挙十二年矣、而詩愈昌」発言をめぐって—科挙の停止と元初の詩文—

九州大学大学院 奥野新太郎

③『詳註周美成詞片玉集』について

竜谷大学非常勤講師 藤原 祐子

④ 饒節初探 愛知大学 三野 豊浩

⑤ 唐宋詩詞における比喩表現—「酥」の表現対象—

宮城教育大学 小田美和子

⑥ 近年出版の三種の歐陽修全集について

九州大学 東 英寿

⑦ 黄庭堅詩歌伝播与接受的本文預結構

南昌大学 邱 美瓊

⑧「明妃曲」之唱和与宋詩之創造性思惟

成功大学 張 高評

三、講演会 11月13日 於早稲田大学

シンガポール南洋理工大学中文系 衣 若芬

蘇軾「黄州寒食帖」及其黄庭堅題跋研究

四、例会 8、9、2、3月を除く毎月

戴復古五律読書会

(内山 精也 記)

● 中唐文学会

第21回大会 10月8日

於広島市まちづくり市民交流プラザ

[研究発表]

- ・「駱賓王における交遊の地縁性」 種村由季子
- ・「静嘉堂文庫所蔵『唐柳先生文集』(宋版)の残巻について」 太田 亨
- ・「唐代詩人の影を追って—河南登封・山西永濟・江西九江旧蹟調査報告—」 内田 誠一

● 名古屋大学中国文学研究室

○中国文学研究室研究会

6月月例会 6月17日

[学部生調査発表]

- ・ 勅撰『晋書』の成立理由と清談の影響 下瀬 明佳
- ・ 「甲骨文・金文研究」 中野 志穂
- ・ 『『韓非子』における酒について』 市之瀬由佳

11月月例会 11月25日

[修士論文中間報告]

- ・ 市河寛斎の『陸放翁詩醇』首巻 金 明蘭

12月月例会 12月21日

[学部生調査発表]

- ・ 曹操の詩について 吉田 奈央
- ・ 『山海経』について 川路 梨月
- ・ 詩と音律について 高山 香織

○名古屋大学中国語学文学会第19回例会

6月26日 於名古屋大学文学部大会議室

[特別講演]

- ・ 有坂秀世博士の生涯 東京都立大学名誉教授 慶谷 寿信

[研修報告]

- ・ ロンドン大学での一年間 金城学院大学教授 張 小鋼

[研究発表]

- ・ 『香奩集』と『春濤詩鈔』——韓偓「香奩詩」及び『春濤詩鈔』への影響 陳 文佳

○刊行物

『名古屋大学中国語学文学論集』第22輯

(陳 文佳 記)

● 名古屋大学中国哲学研究会

○研究会

第56回名古屋大学中国哲学研究会研究会 4月26日

[研究発表]

- ・ 隋唐五代期に見られる罹病時の民間写経活動について——敦煌写経を中心として—— 趙 青山

第57回研究会(7月12日)

『『名古屋大学中国哲学研究論集』第9号合評会』

- ・ 梁音著「正史と二十四孝に見る王褒像の変遷」 今井 美咲
- ・ 小崎智則著「法家における「勢」の展開——馬王堆帛書『老子』乙本卷前古佚書を手がかりに——」 石川 明大

第58回研究会 10月20日

[卒業論文中間発表]

- ・ 董仲舒の自然観と倫理観 近藤めぐみ
- ・ 龍について 新海 里奈
- ・ 墨子の十論と儒家・墨家の相違点 山本 良平
- ・ 老子河上公注における養生思想 李 麗

[修士学位論文中間発表]

- ・ 食養生、喫茶、喫茶養生の思想変遷と『喫茶養生記』に見える受容について 張 名揚

第10回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会

11月20日 於名古屋大学

- ・ 白居易『三教論衡』をめぐる 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 堀 史人
- ・ 二十四孝の成立時期及び『故園鑒大師二十四孝押座文』の位置づけ——孝思想の観点から—— 愛知県立大学非常勤講師 梁 音
- ・ 森春濤の艶体詩について 名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程 陳 文佳

○講演会

11月20日(第10回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会特別講演)

- ・ 中国学の過去・現在・未来 立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所長・大阪大学名誉教授 加地 伸行

○刊行物

『名古屋大学中国哲学論集』第9号(5月25日)

(小崎 智則 記)

● 京都大学中国文学会

○中国文学会第25回例会

7月10日 於京都大学時計台百周年記念館

- ・青木正兒博士の画を寄贈するにあたって 都留 春雄
- ・劉楨詩論 猿渡 留理
- ・韋君宜から見た中国革命史再構築の試み——作家、編集者、革命家の視点から 楠原 俊代
- ・外交官 堀口九萬一の漢詩について 西村富美子

○刊行物

『中国文学報』第79冊(4月)

(猿渡 留理 記)

● 中國藝文研究會

○合評會及び研究會

4月4日(日)合評會・研究會

於立命館大學中國文學專攻共同研究室

『學林』第五十號合評

- ・杜甫の詩に現れる二疊語の擬声語・擬態語について 張 丹鳳
- ・明・周瑛編『詞學筌蹄』について 萩原 正樹

8月5日(木)合評會・研究會

於立命館大學第三研究會室

- ・『銀雀山漢墓竹簡(貳)』と『銀雀山漢簡釋文』の相違 石井眞美子

- ・蘇軾「江神子(密州出獵)」詞の受容と評價をめぐって 池田 智幸
- ・陸時雍の傳記について 鈴木 俊哉

10月16日(土)研究會

於立命館大學中國文學專攻共同研究室

- ・陳祚明の沈約評價 今場 正美
- ・顧炎武刊廣韻の明經廠本廣韻に對しての改變—文字・反切・韻目の改變を中心に— 董 偉華

○刊行物

『學林』第50號(3月)、第51號(6月)、第52號(12月)

(村田 進 記)

● 東山之會

○研究發表 於京都女子大學

2月20日

- ・司空圖の文學論～「格」論とその歴史的位罫づけ～ 伊崎 孝幸

3月20日

- ・孫壽故事の變容に關する一考察～泉鏡花と魯迅・瞿秋白を手がかりに～ 桐島 薫子

4月17日

- ・「故郷」の詩～白居易詩の表現～ 澤崎 久和

5月22日

- ・中國詩歌中の俠客傳統 林 宗正

6月26日

- ・悲歌慷慨 乾 源俊

7月24日

- ・「説」を贈る 谷口 匡

10月23日

- ・司馬相如の駢文における修辭について 土屋 聰

12月11日

- ・晉朝における樂府の位置 一澤 美帆

○『杼山集』譯註(2月20日至12月11日)

卷一「七言酬秦山人出山見呈」至卷二「五言苕溪草堂自大曆三年……四十三韻」

(愛甲 弘志 記)

● 阪神中哲談話会

第386回例会 3月20日 於茨木市福祉文化會館

- ・劉向『列女伝』擘髮伝について 白 高娃
- ・ベトナムの風水書『安南風水の地脈説』 宮崎 順子

第387回例会 7月17日 於茨木市市民綜合センター

- ・江戸時代の家相書・方鑑書にみる明清術数書の影響について—松浦東鷄・松浦琴鶴の著述を中心として— 水野 杏紀

第388回例会 10月30日 於茨木市市民會館

- ・中国イスラームの「釈疑」—布教とは別のありかた— 佐藤 実

第389回例会 3月21日 於ホテルルビノ京都堀川

- ・戦争卜辭と殷代占卜制 末次 信行
- (橋本 昭典 記)

● 大阪大学中国学会

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm>

○研究会

大阪大学・名古屋大学中国学研究交流会

第10回研究会

(詳細については、名古屋大学の記載を参照)

○刊行物

『中国研究集刊』第五十一号〔出号〕(2010年10月)
『中国出土文献研究二〇一〇』(『中国研究集刊』第52号
〔別冊特集号〕)(2011年2月)
(湯浅 邦弘 記)

● 中国出土文献研究会

(平成22年10月より、戦国楚簡研究会を改称)

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html>

○国内研究会合

第40回研究会

平成22年7月19日(月)～7月20日(火)

於大阪大学中国哲学資料室(19日)・ホテルグランヴィア大阪
(20日午前)

- ・「[シ]〈サンズイ〉考」 福田 哲之
- 「銀雀山漢墓竹簡《論政論兵之類》考釈」 湯浅 邦弘
- (翻訳)李学勤「清華簡『保訓』の諸問題を論ず」
草野 友子

第41回研究会(改称第1回)

平成22年10月10日(土)～10月11日(月)

於広島オフィスセンター 第十五会議室

- ・「北京大学蔵西漢竹書について」
湯浅 邦弘・福田 哲之
- ・「北京大学蔵西漢竹書『蒼頡篇』の初歩的検討」
福田 哲之
- ・(翻訳)「北京大学出土文献研究所工作簡報 総第一期
北京大学蔵西漢竹書収蔵後の作業に関する要録」
竹田 健二
- ・「『凡物流形』甲乙本の系譜関係—楚地におけるテキスト
書写の実態とその背景—」 福田 哲之

第42回研究会

平成23年2月11日(金)～2月12日(土)

於大阪大学中国哲学資料室

- ・(翻訳)『清華大学蔵戦国竹簡[壹]』前言 福田 一也
- ・清華簡『楚居』 浅野 裕一
- ・清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』解題
金城 未来
- ・清華簡『保訓』『祭公之顧命』解題 草野 友子
- ・清華簡『尹誥』校読 福田 哲之
- ・清華簡『程寤』 湯浅 邦弘
- ・清華簡『耆夜』 竹田 健二
- ・清華簡『皇門』解題 福田 一也

第43回研究会

平成23年3月19日(土)～3月21日(月)

於大阪大学中国哲学資料室

- ・「岳麓書院秦簡概説」 湯浅 邦弘
- ・「清華簡『尹誥』の思想史的意義」 福田 哲之
- ・「清華簡『耆夜』初探」 竹田 健二
- ・清華簡『皇門』積文 福田 一也
- ・清華簡『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』訳注
金城 未来
- ・清華簡『祭公之顧命』訳注 草野 友子
- ・清華簡『程寤』積読 湯浅 邦弘

○国際学術交流

平成22年8月7日～8日

台湾大学で開催された国際学会「先秦文本與思想國際學術研討會」に、浅野裕一・湯浅邦弘が参加し、研究発表を行った。

- ・「銀雀山漢墓竹簡《論政論兵之類》考釋」 湯浅 邦弘
- ・「上博楚簡〈凡物流形〉之整體結構」 浅野 裕一

平成22年8月31日～9月3日

北京大学を訪問し、北京大学蔵西漢竹書の実見調査を行った(於北京大学賽克勒考古与芸術博物館)。また、北京大学出土文献研究所において朱鳳瀚教授らと会談した。

平成22年10月

北京大学で開催された「北京大学蔵秦簡牘情況通報暨座談会」に浅野裕一、竹田健二が出席し、二〇一〇年一月に北京大学が入手した秦代の簡牘について情報を収集した。

○刊行物

戦国楚簡研究会の研究成果として、『竹簡が語る古代中国思想(三)』(浅野裕一編、汲古選書、二〇一〇年三月)を刊行。
(湯浅 邦弘 記)

● 中国中世文学会

○平成22年度研究大会

10月23日 於広島大学文学研究科

- ・先秦漢の動物寓話について 渡辺志津夫
- ・沈約『宋書』陶潜伝について 森野 繁夫
- ・曹丕「典論論文」の文章について 福井 佳夫
- ・六朝期以前の妓女の文学表現について 彭 腊梅
- ・再生譚の展開—『夷堅志』を中心に— 安田 真穂
- ・猿神・蛇神退治説話の日中比較 劉 暢
- ・揚州「韓江雅集」の詩人群 市瀬 信子

○例会

1月28日
・韋応物の左司郎中期の詩について 山田 和夫

2月26日
・陰鏗の詩について 市原 里美

5月27日
・六朝・唐の小説に見られる「北斗」・「南斗」 許 飛

6月24日
・先秦から中唐の、動物・無生物を用いた寓言について 渡辺志津夫

7月29日
・杜甫の詩語「佳句」に対する意識について 市原 里美

11月25日
・南斗と北斗についての考察 許 飛

12月16日
・唐代の動物寓話 渡辺志津夫

○刊行物

『中国中世文学研究』第57号(3月)

『中国中世文学研究』第58号(9月)

(富永 一登 記)

◎ 広島大学中国文学研究室研究会

第155回 1月29日
[修士論文最終発表]

・漢訳仏典の人称代名詞の研究—二人称代名詞「仁」を中心として— 趙 英来

・老舎『駱駝祥子』の可能補語研究 武内 真弓

第156回 2月15日
[卒業論文最終発表]

・陶淵明の詩語 大島 愛子

・中国白話小説研究—兩月物語との比較を中心に— 福田 理恵

・「陳奐生」系列小説研究 添田 静

・日本語の「た」と中国語の「了」の対照研究 高橋 彩

第157回 5月31日
・陰鏗詩の特徴について 市原 里美

・老舎『駱駝祥子』中の虎妞の台詞 武内 真弓

第158回 6月28日
[修士論文最終発表]

・江馬細香研究—その生涯と漢詩— 彭 琦

[修士論文中間発表II]
・鮑照詩語研究 小西 美代
・清・劉建楷『程楷七山歌』研究 呂 詩詠

[修士論文構想発表]

・『剪灯新話』と『伽婢子』の比較研究 徐 萌
・近世日本における『西遊記』の受容—『五天竺』を中心に— 于 曉琪

第159回 7月30日

[卒業論文中間発表会I]

・中国語方向表現の研究 村山 沙織

第160回 11月26日

[卒業論文中間発表会II]

・中国語方向表現の研究 村山 沙織

第161回 12月17日

[修士論文中間発表II]

・閨秀詩人原采蘋の生涯と詩 徐 萌

・近世日本における『西遊記』の受容—『五天竺』を中心に— 于 曉琪

○刊行物

『中国学研究論集』第24号(平成22年4月)

『中国学研究論集』第25号(平成22年12月)

(富永 一登 記)

◎ 広島大学中国思想文化学教室

第180回研究会 2月9日

[卒業論文・修士論文発表]

・『莊子』の死生観について 高原 伴弥

・『墨子』における節約思想 東 謙伍

・『荀子』における「樂」 花岡 裕

・林羅山における「神(カミ)」と「鬼神(キシン)」—江戸初期における中国思想と日本思想との葛藤— 章 佳

第181回研究会 11月12日

[卒業論文・修士論文中間発表]

・『莊子』の知について 重廣 史也

・『韓非子』研究—徳を中心に— 中尾 知世

・『墨子』の「鬼」研究 櫻井 直樹

・朱熹の天理人欲論—その思想の形成にそって— 坂本 正慶

・『大同書』に見る康有為思想 王 建宏

(野間 文史 記)

◎ 山口中国学会大会

2010年12月18日(土)午後1時半～

於人文学部2号館(研究棟1階)第2講義室

[研究発表]

・「清初における織造の『再建』について」 大岡 愛

- ・「アラビア文字表記漢語文『小経』について」 更科 慎一
- ・「雲南の宣講書『千秋宝鑑』について」 阿部 泰記
(根ヶ山 徹 記)

◎ 第56回中国四国地区中国学会大会

2010年6月12日(土)

於山口大学人文学部小講義室

[研究発表]

- ・陰鏗詩の特徴について 広島大学大学院 市原 里美
- ・菅原道真における白詩の比較表現の受容
岡山大学大学院 潘 怡良
- ・宣講における通俗文芸形式の活用

山口大学 阿部 泰記

- ・日本統治時代の台湾における日本語教育—グアン氏言語教授法に関連して— 山口大学大学院 王 秋陽
- ・虎妞(フーニウ)の台詞にみられる語法上の特徴とその効果 広島大学大学院 武内 真弓
- ・「長恨歌」の普遍性—元稹悼亡詩と「李夫人」を手がかりとして— 愛媛大学 諸田 龍美

[講演]

延異、顛覆與互文：唐代小説對六朝志怪「人神、人仙婚戀」書寫範式之吸納與新創

台湾中興大学中文系教授 林 淑貞
(根ヶ山 徹 記)

◎ 香川中国学会

第70回発表会 2月6日 於香川大学

- 一、史漢比較考—『史記』『項羽本紀』・『漢書』『項籍伝』の場合— 品地沙由理
- 二、日本の中華街—歴史・現状・未来— 鈴鹿まりこ
(間嶋 潤一 記)

◎ 九州中国学会

平成22年度(第58回)九州中国学会大会

5月15、16日 於熊本学園大学

5月15日

- ・駱賓王「帝京篇」と初唐文学における「華」・「実」論 種村由季子
- ・「雲遊詩人」の目に見る日本—徐志摩の日本体験及び関連紀行詩文を中心に— 裴 亮
- ・新たな曹禺評価—中国近代リベラル・フェミニズムとジェンダー論の限界— 張 景珊

- ・「隠語(謎語)」としての鯤鵬説話—『莊子』逍遥遊篇前半部の新解釈— 榑崎洋一郎
- ・台湾美術展覧会から見た台湾表象 羽田ジェシカ
- ・『楚辞集注』宋刻「集注八巻後語六巻」本について 西 紀昭

5月16日

- ・史書として見た干宝『捜神記』 雁木 誠
- ・日本人の中国語学習におけるよくある誤謬の回避法の検討 野田 雄史
- ・宋音に反映された十三世紀の呉方音—声母を中心に— 平田 直子
- ・『藝文類聚』における『初学記』テキストの竄入について 大瀨 貴之
- ・劉宗周最晩年の思想 難波 征男
- ・時代の陥穽—張天翼『華威先生』日本語訳をめぐる— 岩佐 昌暉

○刊行物

『九州中国学会報』第48巻(2010年5月)

(中里見 敬 記)

◎ 九州大学中国文学会

○中国文藝座談会

第245回 1月30日

- ・李白詩における笛 矢原 千裕
- ・お茶と白居易 野田 実里
- ・北方謙三と『水滸伝』—豹子頭林冲を中心に— 日高 舞佳

- ・「らくだ」考—近世日本の庶民文化と中国— 石橋 舞衣

第246回 2月20日

- ・尊円法親王筆「長恨歌」の本文について 静永 健
- ・太公望像の変遷 野口 咲菜
- ・幽婚小説における恋愛—『捜神記』談生を中心に— 岩本 尚佳
- ・梁祝故事と蝶 中馬 早菜
- ・五山詩学主題芻議—以宋学の影響為視点— 羊 列榮

第247回 4月24日

- ・劉大杰文学史思想的形成与日本 陳 廣宏
- ・干宝『捜神記』と六朝の史書 雁木 誠
- ・駱賓王「帝京篇」の創作態度について 種村由季子
- ・宋代文人における文集の自撰と刊刻—陸游『劍南詩稿』を例として— 甲斐 雄一

・『郭沫若全集』未収録の旧詩作品について 岸田 憲也
第248回 7月31日

・ 挙子業と詩一元初の科举停止に着目して—

奥野新太郎

・ 熊龍峯刊行の小説と戯曲について 黄 冬柏

・ 清・顧沅の『聖蹟図』について 竹村 則行

第249回 9月18日

・ 晋代の辞賦注釈史における「三都賦」劉逵注

栗山 雅央

・ 元稹の楽府作品における「古」と「新」 長谷川真史

・ 蘇門における和陶詩の継承について 原田 愛

・ 陳鴻「長恨歌伝」と白居易 陳 翀

第250回 11月13日

・ 清代小説ヒロインの妹像—『隋唐演義』『双鳳奇縁』を中
心に— 旦部 啓子

・ 杜甫乱後初遇鄭虔心理擬構 查 屏球

・ 【スライドショー】中国文学研究室半世紀のあゆみ

九大中文文書室

・ 草創期の頃の中国文藝座談会、『中国文学論集』

岡村 繁

○刊行物

『中国文学論集』第39号(12月)

(静永 健 記)